
ポリクリを終えて

歯学科5年 佐藤大地

長かった5年生のポリクリを終えて、現在は臨床実習の引き継ぎ期間です。あっという間のポリクリからCBT、OSCEと段階を踏んで、今度は本番、患者さんに治療を施す立場になりました。実際の患者さんを目の当たりにすると、ポリクリで習った一つ一つの治療行為に緊張感があり、自分の行動を見つめ直すことができました。

ポリクリとは臨床予備実習、つまり臨床実習に上がる前に必要最低限の知識・技術・態度を習得する実習です。実際には各診療科を回って、講義や模型実習、学生や先生を相手にしての実習があります。講義や模型実習は4年生までに経験していましたが、人間を相手にする学生間の相互実習は初めてでした。特に学生間の相互実習では、印象採得、伝達麻酔の2つが印象に残っています。

模型でやる印象採得は、ただ材料を練ってトレーに持って、模型の口の中に入れてれば問題なかったと思います。しかし、実際の人間で行うとそううまくはいきませんでした。実習の被験者としてまず思った事ですが、印象材が口に入っているととても息苦しい、不快な印象を受けました。口を開けている間、唾液が飲み込みにくく溺れそうになりました。また、トレーの側縁が頬粘膜や歯肉に当たって、押し付けてられている間は痛い思いをしました。術者としては、材料が柔らかすぎると患者の喉の奥に流れてしまいそうだったので、高齢者など嚥下能力の低下した患者には特に気をつけないといけないなど実感しました。

伝達麻酔は本当にドキドキでした。前日から落ち着かず、何度も実習書を読み返してはイメージトレーニングをしていました。実習当日、いざ伝達麻酔をする時になったら、意外にも冷静に麻酔を打てたことに驚きました。前日のイメージトレーニングが効いたのか、実習書をよく読んだからなのか、麻酔を打つ相手が友達だったからなの

か、わかりません。ただ、あの時の緊張感は忘れることはないと思います。一步間違えれば医療事故です。緊張感を保ちつつも冷静でいられることが大事だと感じました。

ポリクリで習ったことはどんなに小さなことも無駄にはならないと思います。臨床実習はまだ始まったばかりでまだまだ未熟ですが、ポリクリやCBT・OSCEを含め、これまでに習得した知識・技術・態度をもとに実践し、さらに磨きをかけていこうと思います。



通学路のやすらぎ堤

歯学科5年 花森玲奈

テストや課題、実習などに忙殺され、気がつくとならぬうちに新潟大学歯学部に入學してから5年半の月日が過ぎていました。5年生になってからはポリクリ、CBT、OSCEなどの大きな学業イベントがあり、さらに忙しい日々を過ごしていたように感じます。それらを終えた10月の現在、ポリクリについて振り返るとともに、この体験記が後進の歯学部生の参考になればと思います。

ポリクリとは病院の各診療科をまわって行われる実習のことで、それぞれの科では臨床を意識したような実習内容が用意されています。私たちの

場合は、コロナ禍であるという情勢を踏まえて、いくつか制限のある中でポリクリが始まりました。ポリクリの特色であり、これまでの実習と大きく違うのは、相互実習があるということです。概形印象、精密印象、筋圧形成、浸潤麻酔、伝達麻酔、スケーリング、フッ素塗布、X線撮影等々…基礎的な歯科の手技を生徒相手に実践で行うことができます。これまで散々模型で行ってきたことや、「こんな簡単だろ」と思っていたことでも、実際に人にやってみるとかなり難しいとわかることがほとんどでした。思ったようにできず、落ち込むことも多々ありました。しかし、そういう時には先生方のご指導や友人からアドバイスなどによってなんとか実習を進められたりもしました。

また、相互実習なので自分自身が患者役になることももちろんあります。その時に、「意外とこ

の動作が痛い」「口をずっと開けているのが辛い」など患者さん目線になって初めて学ぶことも数多くあり、歯科治療をあまり受けたことがあまりない自分自身にとっては特に有意義でした。

さらにポリクリは少人数の班で実習を行うので、一人あたりの先生方の人数が多いというのも良い特色で、とても質問がしやすい環境下にあったと思います。どうしてもうまくいかない時に先生方に指導を仰ぐと、臨床経験を積んだ先生ならではの知識やコツも得ることができました。

ポリクリを終えた現在、実際の患者さんを相手に行う臨床実習を目の前に控えています。目指す歯科医師にまた一步近くことができるという嬉しさの一方で、患者さんに対する責任や自身の未熟さから大きな不安も抱えていますが、ポリクリで得た技能・知識・態度を大いに生かし、これからもまた頑張っていきたいと思います。

